

ケニアにおける豆類の生産流通消費の概要 豆類主要輸出国現地調査報告

(公財)日本豆類協会

公益財団法人日本豆類協会では、豆類の生産において国際的に大きな地位を占める国を対象に、外部機関に委託して、豆類の生産、流通等に関する現地調査を実施しています。前回の豆類時報で報告したタンザニアと同時期（2019年8月～2020年3月）に実施したケニアの現地調査の結果がまとまりましたので、以下にその概要を報告します。



1. ケニアの概観

アフリカ東海岸に位置するケニア共和国は、58.3万平方キロメートル（日本の約1.5倍）の面積を有し、エチオピア、ウガンダ、タンザニア、ソマリア及び南スーダンと国境を接している。2019年の人口推計は4,940万人で、サブサハラ・アフリカではナイジェリア、エチオピア、コンゴ民主共和国、南アフリカ、タンザニアに次ぐ6位となっている。

宗教的にはキリスト教が83%以上を占め（うちプロテスタント47.7%、カトリック23.4%）、イスラム教11.2%、伝統宗教1.7%等となっている。人口成長率は2.6%で、2050年には9,600万人になると見込まれている。

また、東アフリカ地域の中でケニアは、海運・空運のゲートウェイとして地理的要衝を占め、一人あたりのGDP1,998米ドル、経済成長率6.3%（2019年）と域内でも高く、地域経済を先導している。

2. ケニア農業の概観と政策

2-1. 農業概観

ケニアにおける農林業は産業別GDPの構成比の34.2%、労働人口の2/3以上、輸出収入の70%以上を占めるケニアの経済にとって重要なセクターとなっている。市場向け農業生産の75%以上を担うのは小規模農家である。主

要輸出農産物は、コーヒー、紅茶、スパイスであり、輸出全体の26.7%を占めている。主な栽培作物は、トウモロコシ、豆類、サトウキビとなっている。

ケニアの主な農産物の生産状況

	収穫面積(1000ha)	収量(t/ha)	生産量(1000t)
サトウキビ	85	69.4	5,900
トウモロコシ	2,100	1.6	3,391
ジャガイモ	135	18.5	2,500
サツマイモ	88	13.1	1,150
キャッサバ	70	15.9	1,112
インゲンマメ	1,000	0.5	529
小麦	160	3.0	486
米	28	5.2	147
ソルガム	210	6.1	139
カウビー	220	5.6	123

2-2. 農業政策

ケニア政府においては長期開発戦略「Vision 2030」を策定し、農業セクターを経済成長のための柱と位置付けて年7%の目標成長率を設定した上で、農業生産性の改善や灌漑整備による農地拡大等を目指している。ケニアでは、これらの活動の結果、過去10年間に持続的な経済成長、社会開発、政治的利益を実現してきた。

現在のケニアは、食糧の脆弱性という重大な問題を抱えているが、これは国内のほとんどの地域で頻繁に起こる干ばつ、国内食料生産の高コスト等、いくつかの要因に起因している。これらの問題に対応するために、ケニア政府が掲げる「Vision 2030」では、農業生産性を高めて食料と栄養の安全保障を実現するために役立つ各種の政策改革を推奨している。

3. ケニアの豆類生産

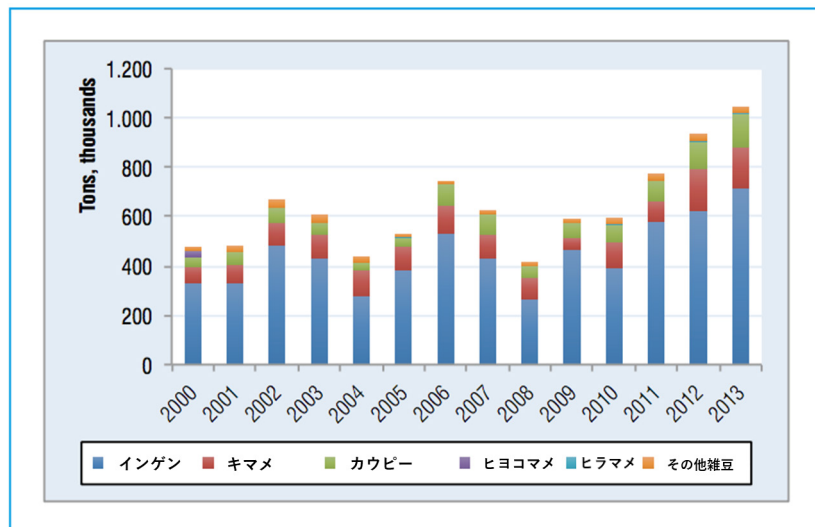
3-1. 生産概要

ケニアにおいては、豆類が穀物に次いで最も重要な食料品となっている。つまり、ケニア人にとって豆類は生計を立てる上での不可欠な手段であるだけでなく、限られた資源しか持たない農民の栄養不良を緩和することにも貢献している。なお、ケニアで重要な豆類としては、インゲンマメ、緑豆、キマメなどが挙げられるが、特にインゲンマメについては、世界で7番目の生産国であり、東アフリカではタンザニアに次いで2番目に大きな主要生産国と

なっている。

ケニアにおける豆類の主要生産地域は、リフトバレー州の東部、海岸部、ニャンザ地域である。国民の消費量は12万1,000トンと推定されており、近年では緑豆の生産と消費を普及する活動が進められている。

ケニアの豆類生産量



3-2. 栽培概要

ケニアの豆類農家の大半が主に使用している作付け体系は混作である。混作は、同じ農地に交互に複数の作物を栽培する慣行栽培であるが、豆類は主にトウモロコシと混作されている。混作をすることにより、土壤の肥沃度が向上し、トウモロコシの生産量が増加し、土地面積あたりの収量が増加することとなる。一般的にはトウモロコシなどの穀物が最初に植えられ、次に豆類が植えられている。

4. ケニアの豆類の集出荷・流通

4-1. 農家からの集出荷状況

① 現地における豆類の選別

豆類が小規模で栽培される場合は、家族全員が作物の収穫と選別に関与しており、中でも女性が主に豆の生産を担当している場合が多い。なお、収穫はほとんどが手作業である。一方、大規模生産者は、作物を選別するために、

ふるいがついた機械を使用している。

② 脱穀

脱穀の方法は、農家の規模により大きく異なることとなるが、大規模生産者は移動式の機械を使用している。一方で、小規模生産者は、常設の機械を使用している。脱穀機は畑に運ばれ、ディーゼル油またはガソリンで稼働させる。それ以外の場合は、乾燥した植物をプラスチックシート等の上に積み上げ、その後、スティックで叩いたり、動物、トラクター、または軽トラックをその上で走らせたりすることで脱穀する。種子に使用される豆は、手作業で脱穀するのが一般的である。



豆類の脱穀の様子

③ 乾燥

乾燥は、基本的に自然乾燥で行う。種子を乾燥させる目的は、保管時における品質の維持のためであり、最終湿度は11～12%である。

④ 包装

商業的には、豆はしばしばコンテナトラックで直接輸送される。さまざまな種類のバッグ（ラミネート紙、黄麻布）が使用されているが、ポリプロピレンが出荷で最も使用頻度が高い。豆は通常、色や品質が見えるように、開いた袋または透明なビニール袋に入れてばら売りされている。

4-2. 集出荷業者

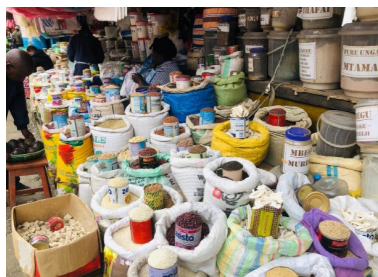
① 集荷業者

集荷業者とは、農家の庭先から豆を集めて、卸売業者に販売する業者である。彼らは現金またはクレジットを用いて、豆を収集するために生産地から

主要な販売地域まで渡り歩いている。こうした業者が豆を収集して都市のセンターに輸送し、地域のトレーダーに販売する場合もあれば、地域の集荷業者が農家から直接大量の豆を購入し、地元のマーケットセンターに輸送する場合もある。大規模な集荷業者やトレーダーは、農家、代理店、他の集荷業者から豆類を購入し、農産物をナイロビやモンバサなどの主要な都市や地元の市場に輸送している。

②卸売業者

集荷業者から豆類を購入して、市場で小売業者に販売するのが豆卸売業者であるが、年間を通してフルタイムで豆の卸売りをしているような業者はまれであり、主に収穫期において豆が活発に市場で動いている場合においてのみ、資本の豊富なトレーダーが豆卸売業者として機能している。オフピーク時期においては、これらの業者は小売業と卸売りを組み合わせたり、豆ビジネスそのものを完全に中止している。



地方市場での豆類の販売状況

4-3. 格付け

ケニアでは、豆類の格付けを行う政府機関と民間機関の両方がある。格付けを行う政府機関には、園芸作物開発局（HCDA）とケニア植物衛生検査局（KPHIS）、およびケニアの生鮮食品輸出業者協会（FPEAK）などの民間組織が含まれている。なお、ケニアでは通常豆類はGrade1、Grade2、Grade3の3つのカテゴリーに分類されている。

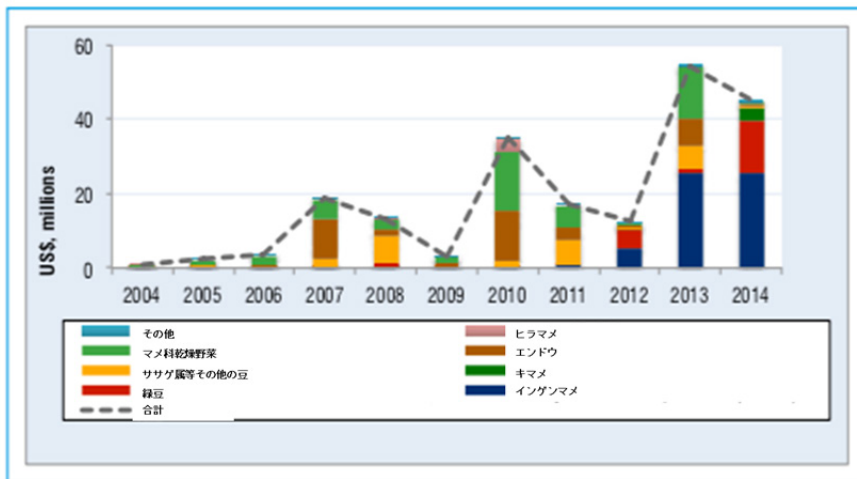
5. ケニアの豆類の輸出状況

ケニアの豆類輸出の大部分は、インゲンマメ（2013～2014年の輸出の51%）が占めており、キマメや緑豆がこれに次いでいる。これらの3つの豆

類でケニアの豆類輸出の84%を占めることとなっており、2004年にはこの3種類の豆類の輸出総額で10万米ドルを超えた。しかしながら、全体としては、ケニアの豆類輸出は非常に不安定であり、明確な傾向はみられない。

なお、インゲンマメおよび緑豆の輸出の割合は、近年において大幅に増加した。

豆類の種類別輸出量の推移



6. ケニアの豆類の利用方法

ケニアでは、トウモロコシやジャガイモと並んで豆類を主食としている。

また、ケニアのコミュニティにおいては、豆類はお祝い事の際に用いる伝統的な食べ物としても使用されている。特にフジマメは子供の誕生を祝うために使用されおり、ポテトと混ぜてつぶした料理を作ることもある。

一方、ササゲもコミュニティでのお祝いの食べ物として、揚げたり、ジャガイモと混ぜたりして食されている。ササゲは一般的に男性の割礼を示すために使用されており、強さの源として男性に与えられる。

このようにケニアでは、豆類を儀式的な食べ物としており、結婚式、埋葬、持参金の支払い、出産、割礼などの機会の際のメニューとして使われている。